

書 評

ジョン・ヒックス著

『ケインズ経済学の危機』

Basil Blackwell : Oxford, 1974

神 保 一 郎

これは著者が1973年 Yujö Jahnsson Foundation の招きによってヘルシンキでおこなった講義が基礎となって書かれたものである。この、どちらかと言えば小さな書物にも著者が常に示す、あのするどい洞察力と創造性に満ちている。ケインズと同時代に生き、ケインズ・サークルの外にありながら最も深い理解をケインズ理論に示したヒックスをおいて外に、このケインズ経済学の危機を乗り越え、新しい理論を指向し、ケインズ理論の何処に問題があるかを示しうる人があるであろうか。

著者は20世紀を4つに分け第2番目の25年間にヒットラーの時代と言われるならば、それに続く25年はケインズの時代と言ってよいとして如何に彼の影響が深く経済学の中に深く滲透しているかを示している。またケインズが生きた時代には必ずしもケインズ理論に基礎を置いた経済政策が取られた訳ではない。1931—2年にイギリスで、1932—3年にドイツで、1933年にアメリカで、それぞれケインズ的な意味で拡張政策が取られているが、ケインズの書物の出版された1936年よりも早いのである。だからケインズの主張が経済学者の間に深い影響を持ち経済政策がそれによって取られるようになったのは第2次大戦以後であった。しかし、このような政策がうまく行くように見えたのは始めのうちだけであった。60年代に入ると、これらの政策が真の経済進歩、或いは成長を生み出す代りにインフレーションをつくり出しているように見えたからである。しかし、この問題を完全に解決するのがここでの著者の意図ではない。それは答えるには余りにも大きな難問であるからであり、その為に本来興味深い従属的な事柄にしぼって議論を進めている。とは言うものの著者の精妙な頭脳はケインズ理論の根底にまで立って、何処にその問題となる欠点があったかを明確にえぐり出している。著者はIS—LM曲線によってケインズ理論の有名な解説を試みた事があるが、この書物ではIS曲線の部分にあたる Saving, Invest-

ment and the Multiplier (第1章) から始めて次に LM曲線の部分にあたる Money, Interest and Liquidity (第2章) がこれに続き、以上2つの議論をふまえて、現代的見地から最も重要な問題と考えられる Wages and Inflation (第3章) に到っている。

I

第1章は、先づ、乗数の理論から説明を始める。消費は所得の関数であり所得のうちで消費されない部分が貯蓄であり、これも所得の関数となる。貯蓄＝投資の関係から投資→所得の乗数の理論を明快にわずかに11行で示しているのは見事である。ただここで生じる困難な問題の1つに投資の結果生じる生産面での問題がある。この事を煉瓦で家を建てる場合を1例にあげて考えている。この投資は家を建てる為の労働とその材料への需要を生み出す。不完全雇用である場合を考えても、もし煉瓦が今までに全て使用されておれば、更に新しい建築は不可能となる。そこで煉瓦のストックの中から引き出しが行われる事になる。それだけ新投資は減少する。この事は煉瓦製造業者を刺激して煉瓦の産出量を増加させる。だがこの点の reaction がどのような形で行われるかとなれば明確な関係が確立していない。投資が気まぐれなのをここでも適用しうる。雇用が投資支出に対して可成りの時の遅れを持っているのを証明もしている。また投資財の生産に関して起った事が消費財についても起るであろう。したがってケインズが議論したようにフローの概念だけで乗数の理論を展開するのは不可能であると言えよう。ストックの状態がここでは考慮に入れられねばならない。即ち投資が行われる場合、ノーマルな水準を over した資本ストックがあるか、或いはそれ以下にあるかによって全く、それ以後の経済の展開が異なるからである。例えばノーマルな水準以上に資本がある場合、需要の増加があってもストックを増加しようとしなからである。乗数過程が進行している間、ストックは減少する。乗数過程が終了した段階ではストックは一層ノーマルな状態に近いものとなる。この場合フローの意味でもストックの意味でも均衡への傾向が存在する。これがケインズが直面した状態でもある。ヒックスの分析はケインズの分析が妥当しない過剰なストックのない状態へと進む。この場合に投資が行われると、需要の増加に対してある遅れをもって生産が行われる事となる。生産の為に必要な資源が不足していれば、いる程この遅れは大きなものとなる。この資源の不足を他の産業のものを引き抜くと言った方法で行われる場合は net での GNP の増加のある場合もあろうし、そうでない場合もあろう。ケインズはこのようにストックに対する配慮が欠けている。

物価を考慮せずに乗数の理論を考えて来たが、ここでそれを導入する。物価変動の原因

としてヒックスは2つのものをあげている。1つは技術進歩による真の生産費の変化であり、もう1つは貨幣賃金の変動である。前者については乗数過程では大した変化は認められないであろうが、後者は労働不足、労働組合によって大きく変化するものと考えられている。また市場を価格一定市場と価格変動市場に分け後者の典型として投機的市場を考えている。そして2つの市場の大きな違いの1つとして、価格一定市場では主として工業製品が取引されストックはノーマルな水準よりも多かったり少なかったりする。一方価格変動市場は著者の主著の1つである『価値と資本』の中で論ぜられたような市場であって、ストックは常にノーマルな状態に固定されている。

II

第II章は貨幣、利子及び流動性であって、LM曲線に関連する議論である。ケインズは monetarist であるが、一般理論では貨幣政策に余り効果を認めず、むしろ財政政策を重視している点を指摘している。投資に影響を与えるものとして(1)投資に対する利子率の効果(資本の限界効率)(2)貨幣供給の利子率に対する効果(流動性選好)をあげており、またケインズの利子理論が成立する為には、申し分のない信用を持つ借り手が市場での長期の貸付けを受ける場合の利子率だけが問題とならなければならない。即ち長期政府債券に対する利子率のようなものだけがこれに妥当する。1930年代のアメリカ、イギリスの企業家はこの種の利子率に大きく影響されているとは思えないとし、これがケインズの書物の問題点の1つである。これが、また、何故ケインズの主張が fiscalism となっているかを説明する。またケインズの場合、投機を重視する顕著な傾向が見られる。経済的な決定は前向きに考えて為されるのであって、将来に起るべき事が互いに比較されている。次にケインズの流動性選好の議論が資産選択とはどのように異なるかを論じている。例えば続けて決定を変えうる機会が全く無い場合、最適資産は危険分散の原理によって所持されるのであって投機が入り込む余地はないのである。しかるにケインズでは投機を持つ役割の重要性の強調が見られる。

III

第3章は「賃金とインフレーション」であってケインズが一般理論の中で殆んどふれていない点に関して議論を集中している。先づケインズの一般理論が全て賃金単位で測られた議論であるのを指摘した後、これがケインズ特有の賃金理論にもとづくものであるとしている。ところが貨幣賃金が何によって決まるかを述べた理論がケインズの中に無いと

し、これが困難の出発点であるとしている。したがってケインズの理論では賃金の決定を論ぜられないし、またインフレーションを論ずる武器を持たないのである。次に Phillips 曲線等の3つのマクロ理論的説明を行った後、賃金の上昇率と失業率の関係が必ずしも Phillips が論じたような型にならない期間も多いとして実証的な問題にふれた後、ここ20年間で2つの段階に分けて考える。第1は需要インフレの時代であり経済は主として Phillips 曲線に沿って動き、好況になればインフレ的となる比較的ノーマルな時代である。しかし、好況になって容易に賃金が上昇しうるのは、ある特別に景気の変動に敏感な産業に限られている。だからそうでない産業に属する労働者には労働の稀少性からではなく、他産業と比較した時の不当性の故に賃金が上昇し、cost push の役割を果たす。

第2段階は著者が特に強調したい期間であって賃金の上昇への社会的圧力が主力を占め労働の稀少性が圧力となって賃金が上昇するのではない。即ち問題のスタグネーション—インフレーションの時代である。著者はこの中で占める予想の重要性を指摘し、ケインズでは資本の限界効率を論じた中で少しこれにふれているに過ぎないとしている。著者は実証的な数字とその理論的見地から Phillips 学派の主張に反対し、失業の減少がインフレを悪化させると信ずべきものもないとしている。「最適有効性が価格メカニズムの自由な利用によって達成出来る世界は遙かかなたにしか存在しないと言う事をはっきり認識すべきである」(p. 85)と述べているのは印象的である。

IV

著者も指摘しているように、ここで取上げられた問題は余りにも重要であり、複雑である。今まで出版された彼の著書に似ず、この問題を徹底的に掘り下げるよりはむしろ問題点の指摘と解決の暗示に留まっている。そう言った意味では不十分な議論も多く、ケインズ経済学を乗り越えようと力んでこの書物を読めば、やや失望を感じるであろう。しかし、この書物の中から、あらゆる方向への発展を汲み取る事が出来るのである。